

短編小説文芸評論秀作選

民主文学50周年記念臨時増刊号

2016

谷間の家

吉開那津子

生きている私たちに語られてくる声

——天折の作家・本庄陸男の志

牛久保建男

斜面抄

稲沢 潤子

樋口一葉「たけくらべ」考

澤田 章子

顔

たなかもとじ

窪田精の方法と立場

——『工場のなかの橋』をめぐって

三浦 光則

やさしい声

秋元いずみ

評論家としての宮本百合子の出発

下田 城玄

ドリフト!

細野ひとふみ

ニヒリズムからコミュニケーションへ

北村 隆志

そこにある希望

松本喜久夫

——右遠俊郎と朝日訴訟

「行動しなかつた人」と「行動した人」をつなぐ思い

二つの城

田島 一

——山口勇子『荒地地野ばら』を読む

須沢 知花

秋ゆく街で

須藤みゆき

変化のなかで再発見される良心

里かぐらと秋風

丹羽 郁生

——黒井千次『五月巡歴』論

三浦 健治

黒いふち猫の絵

橘 あおい

——『新日本文学』の60年』を読む

乙部 宗徳

山の端に陽は落ちて

工藤勢津子

ハンセン病の芸術形象をめぐって

宮本 阿伎

アフサー女子がいく

松本たき子

——その歴史と現実への一視角

松木 新

恋風

石井 斉

同時代の〈海軍〉

岩瀬 剛

せつなげな手

竹内 七奈

徳富蘆花「謀叛論」

尾西 康充

四十年後の通夜

仙洞田一彦

クリストフオロスの変容

尾西 康充

約束

旭爪あかね

——『ショーロホフの』人間の運命』とわたしたち石井 正人

北からの風に

能島 龍三

石川啄木の没後百年

小林 昭

口三味線

青木 陽子

個をつなぎ、連帯を求めて

新船海二郎

空の巣の日々

渥美 二郎

「火山灰地」のダイナミズム

馬場 徹

シングナル

横田 昌則

——『戦いの批評』についてと

久野 通広

エッセー 私と『民主文学』

民主文学創路の二十年 見田 千恵子／わが文学の原点 阿部 誠也／人生を豊かにした『民主文学』 柏 朔司／支部活動が原点 瀬戸井 誠／起点・一九六八年 江崎 淳／歴史の渦の片隅で 須賀田 省一／私と『民主文学』は同い年 なかむらみのる／書くことは、「自分の歴史を残す」こと 山崎 寿美子／彼方からの歲月 増田 勝／「社会と人間の真実」を描く 相沢 一郎／人生を支えるもの 秋元 有子／『民主文学』と共に 山城 達雄

——百田尚樹作『永遠の〇』論

大田 努